第 27 回ハーブサミット in 中芸
中芸ハーブフェスティバル 2020
実行委員会

第 27 回ハーブサミット in 中芸
中芸ハーブフェスティバル 2020 に向けて

１　全国ハーブサミットとは

『全国ハーブサミット』は、北は北海道から南は沖縄まで全国の自治体と法人などで構成される、「全国ハーブサミット連絡協議会」を中心に、ハーブの個性と特色を生かした魅力あるまちづくりを推進することを目的として、これまでに 26 回が開催されています。そして、ほとんどのサミットでは併催イベントとしてハーブフェスティバル等を開催し、地域の魅力を全国に発信しています。また、開催にあたっては、連絡協議会の総会を開き次回開催地への引継ぎをすることが必要となりますが、それ以外は、内容、方法等全て開催地に任され、自由に計画、立案、実施できるのです。

第 27 回全国ハーブサミット in 中芸・中芸ハーブフェスティバル 2020 は、「中芸のゆずと森林鉄道日本遺産の魅力を高め、それぞれの地域の連携を強化し、新たな中芸地域を全国に発信する」等を目的とし、令和 2 年 10 月 31 日から 11 月 3 日まで開催されることとなっています。

２　ハーブとは

ハーブと聞くと草本類を思い浮かべる人が多いのではないでしょうか？「ゆずは柑橘でしょ？ハーブなの？」とよく聞かれます。

確かに Herb の語源はラテン語で「草」を意味する herba です。フランク王国カール大帝（768～814 年在位）は「御料地令」を出し、ヨーロッパ全土で栽培すべき植物を同令第 70 条に示しましたが、ハーブと果樹は分けて記述されていました。そのカール大帝は「ハーブとは、医者の友であり、料理人の賞賛の的である。」と言ったと伝わっており、中世のハーブに関するこの定義は、簡にして要を得たものであると紹介されています。

その後、大航海時代を経て、ヨーロッパになかった植物が世界中に知られるようになり、ハーブの定義は「医者の友であり、料理人の賞賛の的」から、さらに「五感で感じ、暮らしを豊かに彩る植物」のような範囲にまで広がっていったようで、現在では、柑橘類からユーカリや杉などの木本類までもがハーブとして整理されています。

日本でも古くから、1 年を通して七草粥に始まり、桃の節句にはモモの枝を飾ってヨモギやハハコグサを入れた草餅を食べ、端午の節句にはショウブやササ

の葉で餅米を包んだ粽（ちまき）、七夕には短冊を竹の枝につるし、そして冬至にはゆず湯で温まる。また、前回の第 26 回ハーブサミットが開催された淡路島は天然香木から作られるお香と線香の日本一の産地です。

(主な参考文献)
ジャパンハーブソサエティ著：ハーブのすべてがわかる事典　ナツメ社(2018)
マーガレット・B・フリーマン著　遠山茂樹訳：西洋中世ハーブ事典　八坂書房(2009)

３　ハーブサミット in 中芸の意味

高知県は、ミョウガ、ショウガ、ニラ、シシトウ、ナス、ゆずなどハーブといえる特徴的な農産物の生産量が日本一です。また、野菜や鮎などをゆの酢で味付けした田舎寿司のバリエーションも多く、直七や仏手柑、文旦なども加わり、古くから酢みかん文化が根付いています。近年はベルガモット等の生産も始まっているなど、日本でも屈指の柑橘を楽しむ県民なのです。さらに、日本植物学の父と言われる牧野富太郎博士を輩出するなど、ハーブサミットを開催するのにうってつけの土地柄ではないでしょうか。

そして、かつて銘木魚梁瀬杉を運んだ西日本最大の森林鉄道が駆け巡った中芸は、林業に代わる産業としてゆず栽培に力を注ぎ、今や日本一の生産量を誇っており、ゆずの彩りに満ちた景観とゆずの香り豊かな食文化を堪能することができます。

このような歴史や文化は勿論、日本遺産に認定されるほどのストーリーを有する中芸地域でハーブサミットを開催することは、それぞれの地域の連携を強化し、新たな中芸地域を全国に発信する絶好のチャンスだと考えられるのです。

４　ハーブサミットをきっかけに新たな何かが始まる？

ハーブサミットは、ハーブの個性と特色を生かした魅力あるまちづくりを推進する目的で開催されています。そのため併催イベントとしてフェスティバルを開催する町も多くあります。しかし、それだけではありません。

第 22 回の石垣市大会では、サミットの準備段階の市民ワークショップで出てきた造語、「命草 NUCHIGUSA」というテーマで開催されました。

サミット後の現在、滞在型リゾート「星のや竹富島」の「命草畑」や、「Yoga Retreat Village, kSaNa」の「ぬちぐさカフェ」など観光での活用、「ISHIGAKI LABO」による命草を活用した商品開発、伝統食のレシピや栽培方法を伝える「命草(NUCHIGUSA)利活用講習会」などが開催されています。さらに「八重山地方では昔から薬草や野草のことを命草と称していた。」等と間違った記述の HP を見つけることもできます。

第 23 回の久万高原大会のテーマは「森のハーバルライフ」。準備段階から子育てママグループへの働きかけ、地元の高齢者からの聞き取り調査、愛媛県立上

浮穴高校やハーブ関係団体への働きかけ等を積極的に行いました。

その結果、若い人を中心に、以前から町に存在していたハーブ文化を新しい価値観に変えてスタートを切ることができました。サミット後の現在、「森のハーバルライフ」というイベントは継続され、ハーブと生産物のコラボレーションによる商品開発、上浮穴高校卒業生によるクロモジ活動の継続、移住者グループ「くまターンズ」の活動、クロモジを活用するNPO法人「くまーるの森びと」の設立、保育園や中学校での香りの保育・教育等々、数々の足跡が残っています。

このように、ハーブサミットの誘致や準備活動を通じて、住民は地域の資源やお年寄りの知識に気づき、誇りを持つようになった。生活の一部としてハーブを楽しむようになった。生産者はハーブとのコラボレーションにより販売向上につながった。サミットをきっかけに、ハーブ以外の情報も含めて発信する町になり、観光開発や移住者の関心につながった。等々、まさに地域おこしの効果があるのです。

ハーブサミットin中芸、この取り組みをきっかけに何かが始まる。

新しい何かを始めるのは、あなたなのです！